



～（女性建築士の輪）～

奈良県建築士会 女性委員会  
2017 年 冬号  
第 88 号



国指定史跡 頭塔

---

目 次

---

|                                      |        |       |
|--------------------------------------|--------|-------|
| ■ 第 59 回建築士会全国大会 大分大会の報告             | 本保 万貴子 | 1 ページ |
| ■ 近畿建築祭 in KYOTO ～ 山とまちと木造建築 ～ に参加して | 山本 規子  | 3 ページ |
| ■ 私と建築                               | 渡邊 有佳子 | 5 ページ |
| ■ 熊本城の今を見て・・・                        | 寺岡 春恵  | 6 ページ |
| ■ 今後の事業予定                            |        | 8 ページ |

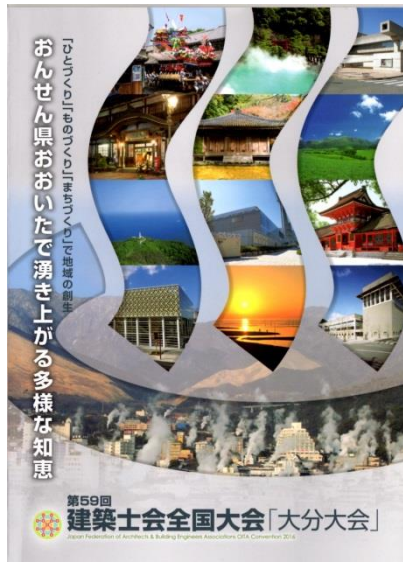
## 第59回建築士会全国大会大分大会の報告

本保 万貴子



第59回全国大会は、10月22日(土)に大分県別府市で開催された。女性委員会セッションが当日午前10時からだったので、前日の21日から現地入りし、雨の中、別府市内を散策。午後2時頃に鳥取県中部地震、翌早朝の午前3時半頃に大分県南部地震を体験。どちらも別府市内は震度2程度だったが、熊本地震の記憶もあり参加者の間で話題になった。

全国大会は、テーマを『「ひとづくり」「ものづくり」「まちづくり」で地域の創生〈おんせん県おおいたで湧き上がる多様な知恵〉』と掲げ、午前中は女性委員会・青年委員会・まちづくり部会・ヘリテージマネージャー・木造建築フォーラムなど7つのセッションがあり、午後1時～2時半には環境部会・情報部会・建築相談部会など4つのセッションと記念講演が同時進行。3時から大会式典となる。それ以外にも折り紙フォーラム、足湯でまちづくりフォーラムやパネル展示などと多彩な内容。午前は女性委員会セッション、午後は建築相談本部会に登録し、時間の合間を縫って他のセッションへもハシゴした。



会場風景

会場は、磯崎新氏設計の別府コンベンションセンター(1995)。

女性委員会セッションは「和室についての報告」。8月から連合会の新女性委員長と

なった小野全子氏から主旨説明があり、次いで本間副委員長から全建女(奈良)の基調講演とパネルディスカッションの内容



3人のパネリスト

リストは、奈良から藤山久仁子さん。奈良で今まで取り組んできた茶室調査から見える「伝統的和室」の代表例とその魅力を発表。「茶室空間は伝統的な和の建築物の一つ」として、茶室の出入り口、窓、床、天井、引き手などの特徴的な例を紹介した。次のパネリストは、富山県建築士会の山中路代さん。「地域性を活かした砺



富山と東京の発表



波の散居村の住まい」の特徴(和室空間、間取り等)とその暮らし方について発表。3人目のパネリスト東京建築士会の多羅尾直子さんが「モダンな和室の可能性」として、リビング続きの和室や独立性の高い和室を例に和のテイストの使い方や和室と周囲の床高さについての提案があった。

最後に、次世代に引き継ぐべき和室の魅力については、和の素材を活用し取り込むこと、和室での作法も含め豊かな暮らし、家への思いを次に繋げる、和の空間を体験することで伝えていく事が重要とのまとめとなった。

大会当日は大雨だったため、会場屋外で出展していたうまいもの市に出かけるも足下は泥んこ。食事場所のテントは満員で、傘をさしながらソバを食べるという曲芸まがいの昼食だったが、おいしかった。

午後の記念講演は参加登録しなかったが、焼酎「いいちこ」のアートディレクターと名誉会長の講演だったためか、お土産はiichiko USA 300mlのポケットボトル(輸出用らしい)と、いいちこのCMデザイン本。両方ともすごく重くて、持帰りが大変だった。

3 時から大会式典は、大分おんせん県の有名な



コマーシャル（温泉でシンクロなど）映像と日本文  
理大学チアリーダー部のパフォー  
マンスで始まり、

各表彰式のあと、次回第 60 回 2017 年 12 月開催の京都府士会衛藤会長に大会旗が引き継がれて大会は終了した。

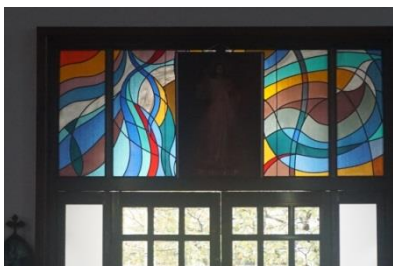
さて、地域交流見学会（エクスカーション）は参加せずに 21 日は別府市内を、23 日は大分市内を巡ったので、少し紹介を。

別府市内は、JR 別府駅から海に向かって繁華街が碁盤の目状に広がり、戦火を免れたこともあって、日本最古と聞く木造アーケードの竹瓦小路などレト



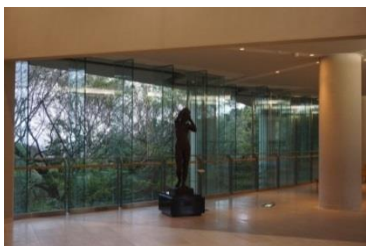
竹瓦温泉女湯入口

前高等温泉は必見。また「別府アートな街」の活動



別府は、その後 12 月に友人達と再訪したが、面白い街である。

大分市内は、磯崎新氏の生地なので作品が多いが、最近の大分市美術館、大分県立美術館、JR おおいたシティと磯崎作品のアートプラザを見て回った。



ロな路地裏を歩くと昭和にタイムスリップできる。別府といえば温泉だがそのシンボルとも言える和風の竹瓦温泉や大正ロマン漂う洋館の駅

大分市美術館は 1994 年内井昭蔵氏設計、確か 2 度目の訪問だが、ロビーに入って正面の大きなガラス開



口部から飛び込んでくる緑が濃くなっていた。

次に、大分県立美術館に向かう。プリツカー賞を受

賞した坂茂氏の設計。2015 年開館。愛称は OPAM（オーパム）。大分市の中心部にあり、ガラス張りのデザインがひととき目を引く。写真は、2 階からアトリウム越しのガラス張り外壁を写したものの。この反対側に「かふえ しゃりて」があり、昼食場所と思っていたが、11 時オープン前の 30 分前から行列ができたので、1 階アトリウムのカフェでコーヒータイムにした。カラフルな卵形の巨大バルーンが立っていたり、世界鳩時計があつたりと大空間のアトリウムも楽しい。コレクション展は 3 階。



県立美術館から 800m、大分城址公園の西側、大分市役所北隣に大分市アートプラザがある。1966 年に建築

学会賞を受賞した磯崎新氏の旧県立図書館を 1998 年に近代建築保存の先駆けとしてアートギャラリーに再生。磯崎作品の模型や資料を常設展示している。

県立美術館とアートプラザから約 1 キロの所に JR おおいたシティ（2015 年 4 月オープン）がある。JR 大分駅に直結して、映画館やレストラン、店舗などの商業エリア、JR 九州ホテル、温浴施設などから成



る 21 階建ての複合施設。21 階にある「シェイスパてんくう」の露天風呂に惹かれたが、商業施設「アミュプラザおおいた」8 階のシ

ティ屋上ひろばに上がった。写真はその建物正面。大分市内が見渡せたが、広場の中心にある「夢かなうぶんぶん堂」内部に彫刻家・藪内佐斗司氏の七福神があるので、近くにお立寄りの節には一見を。

レトロな別府繁華街と新スポットわんさかの大大分タウン。見応えのある今話題の街でした。

## 近畿建築祭 in KYOTO に参加して

山本 規子



平成 28 年 12 月 3 日、京都の名刹東本願寺の隣にある「しんらん会館」において近畿建築祭が開催されました。テーマは「山とまちと木造建築」で、午前の部の講演は、これに沿って

山・里・景色・木づかい・まち・暮らしについて各府県からリレー形式のスピーチが行われました。



特に印象に残ったものは、

山：(奈良県 伏見康司氏)

室町時代から日本最古の植林を行い、林業をけん引してきた吉野の発展の歴史と、建築様式の変化、安い外国産材の輸入、担い手の不足などで山が荒廃している現況から、日本の林業を継承していくことの必要性についての話は、山林見学会に参加させていただいた時のことが思い出されました。自分が生まれる遙か昔に植えられた木々が立ち並ぶ山で、山守さんの話をお聞きしたとき、林業とは、通常のスパンの何十倍もの尺度で考え、途切れることなく継続させていかなければいけない産業であると痛感しました。

里：(滋賀県 竹田久志氏)

10 年前、甲賀市水口町今郷地区で、薪ストーブユーザーの我が家で使う「薪」を求めて始まった活動が、地域住民のニーズに合致して、管理放棄状態の里山をフィールドに、樹木の

伐採、地域住民との交流、里山イベントなどから植林まで発展していったということです。我が家でも、以前からお風呂を沸かすときに、薪を燃料にしてきました。なにしろ工務店です。木っ端は山のように出ます。しかし、わざわざ山へ入り、木を伐り、乾燥させ、割って使う労力を考えると、燃料調達のためだけに作業を続けているはずはなく、活動全体を楽しんでいらっしゃるに違いありません。

くらし：(京都府 吉田玲奈氏)

町家の改修工事に携わる住宅のお医者さん、それをご近所さんに日々の悩みを気軽に相談してもらえる町医者を目指していらっしゃるとか。本当にその通りだと思ったのは、「建物を作りながらコミュニティをつくる。工事中、施工業者がご近所の方と良い関係を作っていれば、住まい手の方がスムーズに入っていける。工事の間、近所の方と住まい手が、楽しい時間を過ごしてもらえるようにしたい。」という言葉でした。

まだ生後 8 か月ぐらいのお子さんを抱っこしながらの登壇は、頼もしい限りでした。お母さんのスピーチの間、すやすや眠っていた坊やもアップレ。

その後、昼食をはさんで、午後の部 7 コースに分かれてのエキスカージョンに出発しました。



私が参加したのは、「住」を基調としたまちなか空き家対策のコースです。行く先の京都東山区の清水寺付近にある六原学区は、祇園界限など観光資源に囲まれた歴史的旧市街で、職人のベッドタウンでしたが、次第に人口が減少し、現在、世帯数 1913 の内、独居世帯が 5 割を超え、空き家率も一部町内

では30%を超えているところもあったそうです。高齢世帯が多く、今後益々空き家問題が深刻化する恐れがあり、加えて戦前からの古い建物や狭隘な路地が多く残っているため、防災上の課題も抱えている地域でした。

平成12年、学区内の児童の減少から、近隣の小中学校を統廃合して、小中一貫校を誘致したことから、後の活発なまちづくり活動の核となる自治連合会が発足しました。その後平成23年までは、主に行政主導で、空き家の調査や、地域住民と連携した空き家の流通促進を手掛けるモデル地区として活動を行っていたそうです。その後行政事業は終了。しかし、六原地区では空き家問題をまちづくりの一環ととらえ、成果にとらわれない地域に根差した取り組みとして継続していくことになりました。

平成24年からは、地域が主となり、空き家の活用流通に重点をおくのではなく、空き家の予防と町全体としての問題意識の啓発のため、「空き家手帳」を作り全戸に配りました。内容は、空き家に悩むすべての人へと銘打って、分かりやすいQ&Aで空き家を放っておかないための考え方、使い方が書かれています。ごみ箱行きにならないよう、立つくらい分厚い本にしたそうです。



地域の会合の時に出席の空き家の出前講座、空き家相談窓口の開設などに加えて、防災という視点から見たまちづくりの取り組みも進めており、京都特有の90箇所もある狭い路地に、名産の清水焼で作った銘板をつけることによって、火事などの時に、いち早く場所が分るようになっていました。消防署にも公認の路地の名前です。名前の付け方も楽しくて、町の名前だけでなく、奥に植わっている植物の

名前や、地主さんの名前など、様々でした。



実際に町を歩いてみると、正面から見るとそんなに傷んで見えないのに、裏に廻ると今にも倒壊しそうな建物もあり、継続して活動を行うことの必要性がひしひしと感じられました。

空き家を改修して、新しい住人を迎えた建物も見学しました。「あじき路地」は、路地をはさんだ長年空き家になっていた長屋を相続したオーナーが、住めるように改修し、若い人が努力して独り立ちできるようにと、安い賃料で貸しているとのこと。インターネットで募集すると、30倍以上の応募者があるそうです。パン屋、手作りアクセサリー、ミュージシャンなど色々な職業の若者が入居されていました。

私にとって、今回のエキスカーションは正に「渡りに船」でした。なぜかという、地元桜井で協力している「まちづくり協議会」で、空き家対策の部会を立ち上げるので参加してほしいと依頼を受けたところだったのです。勿論、六原地区の活動手法がそのまま使えるはずはありませんが、なにより地元主体のまちづくりを進めてこられた住民の方々のお話は、地に足がついているというか、味わい深い。

- ・地域でできることは地域です。
- ・メンバーは、やりたい人ではなく、忙しい人をお願いする。
- ・行政が声を掛けたくなる地域にする。
- ・新しい取り組みは、どこよりも最初にする。

いかがでしょう？



子供のころはパン屋さんになりたいとか、漫画家になりたいとか、学校の先生になりたいとか、身近にある職業に憧れていました。周りに建築関係の仕事をしている人はおらず、建築の仕事があることにも気づいていなかったと思います。

そんな私が建築のことを意識したのは、阪神淡路大震災の時でした。ニュースで流れていた壊滅状態の大好きな神戸の街の映像は、衝撃的でした。当たり前にあると思っていた「まち」が突然なくなり、当たり前の暮らしが当たり前でなくなる様が映像の中にありました。そして、多くの建物が倒壊し被災された方々が、避難所や屋外で過ごされるニュースを見て、普段人は多くの時間を建物の中で過ごし、建物に守られて暮らしていることに初めて気付きました。人が生き生きと活動し、暮らすためには安全で安心な建物が必要だということを知ったのです。

その時すでに社会人だった私は、建築に関わる仕事をしたいと考えるようになり紆余曲折。働きながら専門学校で夜間の部で建築を学び、卒業した時はちょうど30才でした。人より10年ほど遅れてスタートした建築人生です。10年の遅れを取り戻そうと、今も日々がむしやりに働いております。

建築の仕事をしていておもしろいのは、いろんな出会いがあることです。人との出会い、場所との出会い、多くの気付きを与えてくれます。これから住まいを建てようとしている方々の、新しい暮らしを思い描きながらの打合せほど、楽しい時間はありません。

最近特に関心を持って取り組んでいるのは、「町家の再生」と「持続可能な暮らしを実現するための住まいづくり」です。町家のことをもっと知りたいと思い、昨年事務所を奈良町に移しました。残念ながら町家ではなく、築90年ほどの長屋を借りています。それでも格子窓の安心感と、木と土壁でできている建物の快適さは素晴らしいと感じています。

奈良町の町家には、住民が共存しながら快適に暮らす工夫が多くあります。間口が狭く奥行きが深い敷地には必ず中庭が設けられ、隣同士の中庭がほぼ同じ位置で並ぶことでお互いの日当たりと風通しが約束されます。平入りの大屋根は道路側が低くなるので、道路や道路向かいの建物の日照と採光に配慮されています。軒と格子が連なる景観はとても美しいです。格子はプライバシーを確保しつつ採光と通風を確保し、隣家堺の妻壁には隣を覗き込める窓を設けないなどの配慮もあります。暮らしへの配慮もあります。奥行きの深い敷地を活かすための通り庭や、空気の流れを作る吹抜け、快適に暮らすために季節ごとに建具を入れ替えるなど、多くの知恵が詰まっています。

そんな町家の素晴らしい知恵を、現代の住まいづくりに取り入れたいと考えており、それが「持続可能な暮らしを実現する住まいづくり」につながっています。街に溶け込みながら快適な空間を作ること、自然を感じながら暮らす工夫、パッシブエネルギーの利用、環境に配慮した材料の使用、地域の暮らしの文化を受け継ぐことなど、町家の知恵を活用できる要素が多くあります。まだ、私の頭の中では整理しきれずバラバラな感じですが、それらを整理し実践していくことが、これからの課題だと思っています。



事務所になっている奈良町の長屋

平成28年もあと残すところ1週間という時期に熊本に行く機会があり熊本城へと足を運んでみました。

熊本地震発生直後から映像に映し出された熊本城の石垣の崩壊は、地震の凄さを感じさせるには十分なものであったかと思います。その後、熊本城はどのようなになっているのか？関西に住んでいる私たちにとって少し気になるところです。

熊本市内は、既に平常を取り戻しており、年末の賑わいが、町のあちこちにみられました。商店街では、熊本の復興を願う人たちの「上を向いて歩こう」の大合唱のイベントが行われ、商店街中に歌声が響きわたっておりそのパワーを感じました。

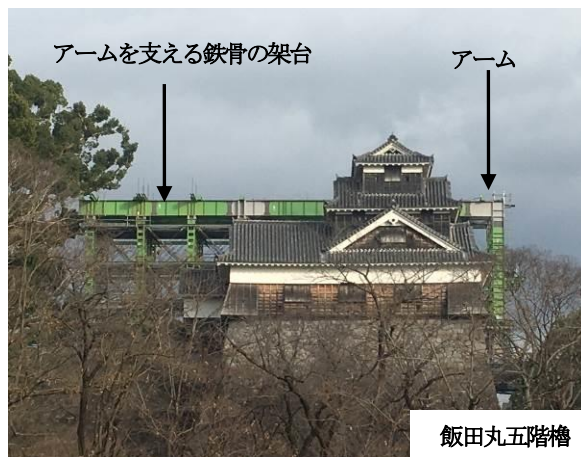
熊本城に向かう途中の街並みは、4月にあった大震災を思わせるものはなかったのですが、熊本城に到着するや否や、石垣の崩落の惨事が目の中に入ってきました。その姿は、映像より更に凄いものでした。敷地内は、ほとんど立ち入り禁止区域になっており外周から眺めるという状態でありました。



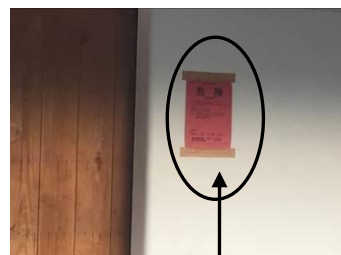
まず、見えてくるのが、1本の石組で支えられている飯田丸五階櫓を鉄骨で補強し倒壊を防いでいる姿が見えます。

櫓を支えるアーム状の巨大な鉄骨をくみ上げ櫓を抱え込む位置まで移動し今の状態となり崩壊寸前の櫓を支える様です。

進んで行くと櫓が石垣ごと崩落したものや施設建物には、応急危険度判定の「危険」の赤い紙が貼られたものなどありました。



石垣と共に崩落した櫓



「危険」の赤い紙

建物の側には、全く近づく事が出来ず、二の丸広場を通る順路で熊本城内を眺める様に進んで行きます。

お堀に沿って築きあげられた石垣は、いたるところで崩落しその痛々しさが目に次から次へと入ってきます。さらに進み二の丸広場北側までたどり着くと、飯田丸五階櫓と同じく1本脚で建物を支えている石垣が見えてきます。この建物「戌亥櫓」という櫓で本丸から「戌亥」（北西）に位置し加藤清正が1607年に完成し1877年に解体され2003年に復元された櫓だそうです。木造3階建ての建物は、この隅石によって支えられ思わず「がんばれ」と声が出てしまいそうです。



その石垣ですが、この度の震災で熊本城内には517面の石垣があり、その1/3が被害にあったそうです。熊本城は、特別史跡に指定されており修復にあたり国の補助を受けられるのですが、ほぼ元どおりに戻さなければならないとの事。そのため、過去の石垣を修復した時のデーターを石垣検索ソフトに落して検索し石の位置を確認していき、修復データーにない個所については、某航空会社の機内案内用に作成された熊本城のドローン映像をもとに石垣の積み方を確認して敷地内に集められたナンバーを付けられた石を積んでいくという気の遠くなるような作業をしていくそうです。

その費用は、熊本城修復予算634億円中425億円、約7割が石垣修復にかけられる費用との事です。

熊本城は加藤清正公が6年の歳月をかけて築城されましたが、今回の修復には20年がかかるらしいです。いかに元通りに修復する事が大変な作業なのかが分かります。

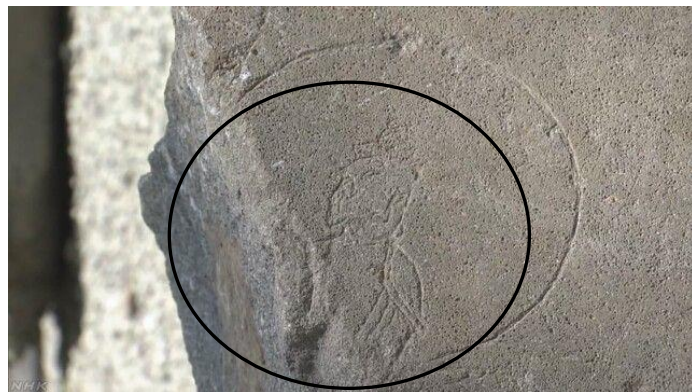
その復興を支援する方法として、「復興城主」というのがあり1回1万円を寄付することにより「復興城主」となり「城主証」が発行されデジタル芳名板にお名前が登録されるそうです。また、「城主手形」が発行され熊本市内の観光施設や協賛店舗で数々の特典を受ける事が出来るそうです。九州にご旅行の際には、この際、復興支援に協力し、かつ、熊本の街を割安で楽しむというのも良いのではないのでしょうか？

二の丸広場を過ぎ加藤神社の側まで行くと天守閣がはっきりと見えてきます。天守閣は、外から見る限りでは、屋根瓦の被害が大きく見えるだけなのですが、実は内部も甚大な被害を受けているとの事です。市は平成31年には、熊本のシンボルである天守閣だけでも元の状態に戻したい意向です。



私の写真では分かりにくいですが、屋根瓦がほとんどないです。実は、草なども生えてきているそうです。

今回、崩れた石垣の中から400年前の中世仏教供養の為、観音様が掘り込まれた石が見つかったそうです。熊本城をつくる時に、急いで石を集めた為、この板碑が石垣の石に使われたのでは？ということですね。震災がきっかけで顔を表すことになったのですね。これから修復していく中で、また、新たな事がいろいろとでてくるのでしょうか？



壊れた石垣の中から見つかった観音様

この度、熊本城を見て、日常を取り戻した市街とは違い、まだまだこれから長い震災からの復興が、ここにはある事を感じました。

また、帰りには、益城町を見てきました。昨年、夏、西原村にボランティアで伺いこちらも倒壊した建物やブルーシートで追われた家屋を見てきましたが、益城町は今でもたくさんの家屋が倒壊したまま、ブルーシートがかけられたままの状態、まだまだ復興までには時間がかかるのだろうか？と思わされました。



関西と九州、離れてはいますが、何か出来る事は忘れず支援できればと思う熊本めぐりでした。

♪♪♪ 今後の事業予定 ♪♪♪

- ☐ 2月 7日 (火)  
実務者のための設計・監理契約書講習会
- ☐ 2月 11日 (土・祝)  
建国記念の日
- ☐ 2月 22日 (水)  
住宅無料相談会 (奈良県建築士会館)
- ☐ 2月 23日 (木)  
第4期定期講習 (ホテルリガーレ春日野)
- ☐ 3月 11日 (土)
  - ・奈良県景観デザイン賞表彰式
  - ・奈良県地域文化財建造物専門家スキルアップ講習会 (第5回)
- ☐ 3月 18日 (土)  
奈良県地域文化財建造物専門家スキルアップ講習会 (第6回)
- ☐ 3月 22日 (水)  
住宅無料相談会 (奈良県建築士会館)
- ☐ 3月 24日 (金)  
理事会
- ☐ 3月 27日 (月)  
監理技術者講習

\*\*\*編集後記\*\*\*\*\*

平成29年もスタートしてはや、1ヵ月が過ぎようとしております。「一月は行く。二月は逃げる。三月は去る。」と小学校6年生の時、担任の先生が、卒業の日までは、あっという間にきますよ。大切に過ごしてください・・・という思いで言っておられました。

今では、日々忙しく時間に追われ、毎年毎年、時間の流れが早く感じられる様になっております。もう少し、1日1日を今年は、大切に過ごしていければと思っております。

その様な思いでスタートした平成29年。子供との時間も大切にと子供と1本の映画を見に行きました。「この世界の片隅に」という第二次世界大戦下の広島・呉を舞台に描かれたアニメ映画です。すずという主人公の女性をとおして、度々空襲があるという厳しい時代の中、毎日の生活を明るく大切に暮らしていく様が丁寧に描かれており、日常の大切さを実感させられる映画でした。

戦火で失われた広島や呉の街を当時の資料や戦争体験者の方々のお話をもとに忠実に再現され、映画を見ながら当時の街の姿を見る事も出来ます。

この映画は、クラウドファンディングというインターネットで制作費を募るという方法で製作された映画で、たくさんの方の協力のもとつくられたものであることもこの映画の素晴らしさに一石を投じているように思います。

毎日を大切に生活出来ればと思いスタートした平成29年のスタートに、毎日の日常が大切であるということを感じさせてもらえる映画に出会えたことはいいスタートがきれたかな？皆様は、どのようなスタートを迎えられましたか？

本年もよろしくお願い申し上げます。

(寺岡 春恵)

\*\*\*\*\*

